

トラさんは間島さんともよく喧嘩した。ある日、衛生指導員会で、間島さんが「消毒液の予算がないから今年は消毒はやらない」といったので、トラさんが「馬鹿野郎！ 人をただ使っておいて、消毒出来ないとはなんてことだ」と怒った。役場の食堂で間島さんと取っ組みあいになり、ようやく左千雄さんがとめた。

すぐ取っ組み合いになる

後日の指導員OB会での会話。トラさんの他に井出左千雄、井出守、渡辺一明、佐々木喜一郎さんたちが飲みながら話している。

佐千雄「間島さんもトラさんも少し酒を飲むと酒乱になる。どっちも負けず嫌いだから。

間島さんも「それならおめえ、やるならやってみろ」ということになって喧嘩になる。

大体少し飲むところなる」。

トラ「少しじゃねえ。たんと飲んだんだ」(笑い)。

佐千雄「たんと飲んでならまだいいが、たんと飲まねえうちにそうなるから困るんだ」(笑い)。

守「間島さんも酒癖が悪いところがあつたが、会長のトラさんも強引なところがあつた。

会長の強引さにつられて、われわれも一所懸命に健診の手伝いには出てきた。「何でお前、

出て来ねえんだ」とすぐ怒られたからねえ」（笑い）。

一明「たしかにそれはあるね。今でいう民主主義というもんじゃないな」（笑い）。

守「ありや資本主義だ。強引なもの」（笑い）。

トラ「でも、みんなよく俺についてきてくれたなあ。まあ、一杯飲んでくれや」（笑い）。

喜一郎「結婚しているのはトラさんだけだったからね。それだからよかったんだよ」。

佐千雄「あとはみな独身だったからね。トラさんには頭があがらなかった」。

トラ「強引と言われるけど、俺と間島と村長はいつも一緒にいて話していたから、やり方が似てきた点があったかもしれないねえな」。

佐千雄「俺は直接村長のところへ行つて、トラさんと間島さんがいるからいやだ。指導員をやめさしてくれと言ったことがある。そしたら村長に大変怒られた」。

トラ「後で村長に呼ばれて、『お前、だいぶ酒飲んで悪たれたそうじゃないか』と言われ
たが、『酒飲めば誰だって悪たれるわい。村長が酒飲んで踊るのと同じだわい』と言っ
たら、『そりゃそうだ』と村長が納得した。これで一件落着き』（笑い）。

トラさん大いに怒る

トラさんは思ったことは何でも率直に口に出す。それがけんかになる原因でもあるのだが、

また一面、表も裏もないのが彼の良いところでもあった。

当時、健康管理を担当していた松島医師が、トラさんからひどく怒られたことがある。衛生指導員の同僚であった菊池勇治郎さんが亡くなったときと、それからずっと後になって、役場の間島さんが亡くなったときである。いずれも悪性腫瘍による手遅れであった。

「健康管理をやっている、なんで手遅れで死なせなきゃならねえんだ。本人の不注意もあつたかもしれないが、こんな健康管理なら止めてしまえ」とトラさんはいきまいた。松島医師は返す言葉もなかった。全くトラさんの言うとおりであった。

当時の健診内容のこともあるが、がんの早期発見はなかなか困難で、健診を受けていても、たまには手おくれが出るがあった。これでは健康管理の意味も薄れてしまうことはたしかだ。

とくに農民体操を熱心に推進してくれた菊池雄治郎さんは、トラさんの姉のご主人ということもあって、トラさんは全く機嫌が悪かった。その後、一カ月は口も聞かなかつた。

間島さんの死は、トラさんだけでなく、病院の担当者たちにも相当ショックを与えた。間島さんは村の健康管理の実際の責任者であったし、本当のところ間島さんがいたからこそ、ここまで健康管理が進んだのだった。最後は助役になったが、「将来は村長をやるんだ」と意気込んでいただけに、その夢が叶えられず、さぞかし悔しい思いだったろう。トラさんも長年のけ

んかともだちを失ってすっかりしょげていた。

新しく佐々木庫三村長に

やがて昭和三十九年、村長選があり、井出村長にかわって新しく佐々木庫三村長が登場することになる。

井出村長は多少ワンマンのところがあったが、佐々木村長はおだやかで、強引なところは少しもなかった。ただいちばん心配したのは、村ぐるみの健康管理がそのまま続けられるかどうかということだった。しかし、心配は無用だった。健康管理の方針は少しも変わることはなくそのまま継続された。

佐々木村長は、衛生指導員の活動を高く評価していた。「健康管理のことはもちろんだが、村長が何かやろうとするとき、指導員のみなさんは、殆ど手足となってよくやってくれた。だからとてもやりよかった」と当時のことを語っている。トラさんについては、「口は悪いけど、足まめでみな面倒をよく見ていたね」と。

トラさんは、翌四十年、衛生指導員会長のまま村会議員に初当選した。衛生指導員の村会議員第一号であった。

春の息吹に英気を養う「タラの芽会」

健診の反省会を兼ねて

八千穂村と佐久病院との交流の場として、「タラの芽会」という集まりが毎年持たれているが、このことについて少し触れておかねばなるまい。それを持つようになったのは、次のようなきさつがあった。

山間部である松井区や大石区の健診では、夕飯時によくいろいろな山菜料理がいただけた。衛生部長さんは、「これはタラの芽だ。幹はトゲがあつて採るのに大変だが、春一番の出たての芽は柔らかくて旨いんだ。たくさん採って塩漬けしておいて、お客さんが来たときとか正月などに、塩抜きして、こうしてゴマ和えなんかにして食べるんだ」「これはウドだよ。ぜんまいもあるだろ」などと紹介してすすめてくれた。聞けば、春のうちから冬の健診に向け、たっぷり確保しておいてくださっている貴重なもの。

昭和四十年代の私たちの暮らしには、山菜採りなどのゆとりもなく、それまで食べたこともなければ、生の姿も知らなかった。それで興味深くあれこれ聞きこむことになって、ついに誰ということなく、「今年の春はみんなでタラの芽採りをしよう」ということになった。

それがきっかけとなり、役場、健康管理部、衛生指導員と、大石区や松井区、八郡区の衛生部長さんなどで、ひと冬の健診のご苦労さん会を兼ねた自然に親しむ交流の場「タラの芽会」となった。

青い空のもとでの「山の味」

まずみんなで手分けしてタラの芽を採りにいく。大石区からかなり奥まった静かな駒出池のほとりに荷を下ろして、造林小屋のあたりまで山道をたどる。

トゲだらけのタラの木にも驚いたが、Yの字の形に工夫した木の枝で、トゲの幹をたぐり寄せて、芽が出たてのやさしい形のタラの芽を、難なく採っていく衛生指導員らの、手慣れた名人ぶりにも驚かされた。

女性たちがトゲに引っかかれてキャーキャーとタラの芽に気を取られているうちに、うその口区の衛生指導員古屋光信さんが、いつのまにか「ほら、ワラビとコゴミもいい時期だよ、病院のおみやげに持っていけや」と、どっさり抱えて森の中から出てくる。あのゼンマイみたいなシダの芽がおいしいコゴミだということも初めて知った。

ひと足先に天ぶらの準備をしてくれていた、役場の衛生係佐々木房子さんたちの所に集まって、いよいよ収穫物をいただく番になった。大鍋にたっぷり油に、採りたてのタラの芽やウ

ドの葉、コゴミなどを粉にくぐらせてとんとんと豪快にあげてゆく。そのほくほくとした山の味は、身も心も浄化してくれる。まさに「山の味」のおいしさだった。

でも本当は、「こんなに大きな葉になっているのを採ってきて」と、困りながら揚げたと笑い話にされたりした。男性軍はジーンズスカンに取り組んで、さかんに焼けたのをサービスしてくれる。山歩きの後のビールのうまさと相まって、青い空のもと、健診での失敗談などに花が咲いた。

そして、運転免許を取りに山梨に泊まり込み、二週間で取ってきたなどと、井出佐千雄さんが、その時の顛末をおかしく披露してくれる。「じゃあ、オレもそこに行く」と身を乗り出して聞く指導員がいたり、最近できた村の工場の仕事の様子や、近くにスキー場ができるといった話を聞くチャンスになったりする。何かの力で村が変わっていく様子が感じられた。

自由なふれあいの良さ

また、「あるとき保健婦さんが、洗剤を止めて石鹸にしたらどうかと言ってくれて、すっかり手の荒れがなくなって良かったです」と、衛生部長さんの家のお嫁さんが手を見せてくれて、何年か前の健診でのことを確認できたりすることもある。

健診や報告会では、そのことに追われてせかせかと時間が過ぎてしまえばかりで、本当の交

流とはいえず、こうした自由なふれあいこそ、みんな仲間といった連帯感も醸し出され、理屈を越えた交流の重要性が実感される。

やがて八ヶ岳の空が真っ赤な夕焼けとなり、みんなで輪になって「朝霧晴れて〜」と病院の歌を歌い後かたづけをするのだが、村の人たちの豊かで優しい包容力に包まれ、心から癒されて解散しがたい思いが募ってくる。

やがて、もっと多くの職員が参加して、毎年恒例にしていこうということになり、健診に係わってもらっている院内各科に呼びかけ、医局や研修医も参加するようになった。役場からも村長さんや助役さんも見え、総勢四十人を越える大交流会になった。

昭和五十年代には、午前中は松井のグラウンドでソフトボール大会で汗を流してから、山菜採りをし天ぷらに取り組むといったパターンが定着してきた。

指導員の上手なピッチャーぶりや、村の担当係が良く打てる野球人だったといった、今まで知らなかった側面が知れて、これもとても楽しい交流である。

まあお蔭で自分たちの運動神経の弱さも披露することになったのだが、似たような人が何人かいると、これもまた仲間意識が強まるから、捨てたものではない面白さがある。大らかな昭和の時代ではあった。

現在では参加者は百人を越え、会場も山ではなく、平地の老人福祉センターの横に移ってし

まったが、ちよつと残念な気がしないでもない。

体中浴びた農薬・ホリドール

除草剤で大やけど

昭和四十一年の九月のことである。八千穂村の森林組合から、佐久病院の松島医師のところへ電話がかかってきた。「今、除草剤で体じゅう大やけどした人が出た。病院へ送るから、すぐ診てくれ」と言う。

やがて二人の男性が担架に乗せられて病院へ運ばれてきた。診察の結果、とくに下半身のやけどがひどく、早速入院となった。事情を聞いてみると次のようである。

二人は、村有林で除草の作業をしていた。使った薬剤はクロレートソーダ（塩素酸塩）という除草剤だった。これは山林の木々の間に生えるササやススキなどを枯らすためによく使われていた。

ところがこの薬剤は発火しやすいというのが特徴である。スポンに薬剤がついていたのを知らないで、タバコを吸ったところ、それが引火したということだった。

後になって、村の保健婦の井出今さんが「私、除草剤で大やけどしたと聞いてびっくりしたんだけれど、除草剤が燃えるなんて知らなかった。除草剤といっても随分こわいものだね」と述べたくらいだから、撒いた本人もそんな危険な除草剤だとはよく知らなかったのであろう。これは山林除草剤として古くからあった薬剤だが、ふつうの田畑には使っていないので、一般の人が知らないのも無理はない。だが、この種の薬剤はアメリカがベトナムの枯葉作戦で大いに使ったものだ。空から撒いて灌木や草が枯れたところで、全部焼き払ってしまうのである。二人はかなりの重症であったが、幸い命だけはとりとめた。

園芸作物の団地化へ

かつての八千穂村の農業といえば、コメとカイコ（養蚕）が主であった。山間地とあってコメの収量は限られている。カイコの収入でなんとか生計も保てたので、村の人は「おカイコさん」と呼んでカイコを大事にした。しかしカイコの仕事は、主に女性にまかされていたので、女性にとっては大変な重労働であった。

当時のことを佐々木庫三村長さんは、「嫁さんなどはみなやせ細ったね。稚蚕のときは夜昼なかったし、早蚕になってもいい繭をとろうとすれば、夜も目をこすりこすり、がまんして桑をやる。そういうがまんが重なるから、繭があがったときには、皆げっそりとしていた」と述

べていた。

そのうち繭の値もだんだん下がり、コメとカイコだけではやっていけないということで、穂積農協と畑八農協（後に合併して八千穂農協となる）では、園芸作物の団地化を図るという方針を立てた。

昭和三十年代後半から四十年代にかけて、リンゴの団地、キクの団地、野菜の団地が次々とできていった。だがこれを機会に、一方では農薬の使用量が飛躍的に増えていったのは当然だった。

古くから使われていた硫酸ニコチンやポルドー液と並んで、果樹や花には、戦後開発された新しい合成化学農薬が次々と使われるようになった。

最強の農薬・ホリドールが登場

キクの栽培にいちばん使ったのはホリドールであった。殺虫剤として当時ではいちばん強い薬剤だった。

しかも皮膚からの吸収がとてもよい。諏訪地方で、ホリドールを希釈するのに、素手でかき回しているうちに意識がなくなり、ついには亡くなったということが新聞に出て大きな話題になった。

健康管理を始めた八千穂村の住民といえども、農薬についての知識は十分ではなかった。農薬を撒くのは朝夕が主だったが、夏場の散布だからどうしても薄着だし、上に着るものもふつうのカップパだった。マスクも簡単なガーゼマスクだから、どうしても体に吸収してしまふ。

当時、農協の営農技術員として八千穂村を担当していた清水喜一郎さんも、防具のことは十分指導はしたけれども、なかなか思う通りにはいかなかった。

だからホリドール散布後、多くの人は「具合が悪いや」と言つて、午後は半日家でごろんとして寝ていた。「ホリドール撒いたから、今日は半日休みだ」と決めている人もいた。皮膚障害も多く、キク消毒を毎年続けて全身の皮膚病を起こし、三十年経つて未だに治らない人もいる。

リングには硫酸ニコチンをよく使つたが、これもしばしば中毒を起こした。清水さんによれば、夏場になると、ホリドールと硫酸ニコチンだけで、入院や病院通いをする人が村だけで十人はいたという。

四人に一人が中毒症状を経験

そういうなかで、衛生指導員会では、「もう少し、農薬のことを知らなきゃいけないのではないか」ということで、勉強会で農薬のことを取り上げることにした。佐久病院の松島医師た

ちを呼んでいろいろ話を聞いた。その結果、農薬の影響は散布者だけでなく、農作物に残留したり、環境を汚すこともあるということを学んだ。

しかし、なんと言っても直接農薬を撒く散布者自身の健康上のことがいちばん心配である。しかも実態はよく分からない。そこで佐久病院といっしょに「農薬使用者健康カレンダー」を作って、散布した後どんな症状が出るかを毎日つけてもらうことにした。

これは、カレンダー式になっていて、毎日、散布の有無、散布した場合はその農薬名、散布時間、防具の状態、散布した後どんな症状が出たかなどをつけることになっている。それに合わせて健診もやることにした。

対象地区は、キクを主に栽培している穴原・崎田区と佐口区である。担当は前者が衛生指導員の渡辺一明さん、後者は井出佐千雄さんがやることになった。

調査は、昭和四十一年の六月から九月まで行われた。その結果はとてもショッキングなものだった。頭痛や頭重感などの軽い症状も合わせると、農薬を多く使うその四カ月間に、男性では三人に一人、女性では五人に一人、平均して四人に一人が中毒症状を経験していたということが分かったのである。

また、マスクや手袋は殆どつけず、顔に液がかかっても直ぐ洗うところか、「涼しくて気持ちがいいや」などという人もいて、農薬知識の不十分さが浮きばりにされた。

これではいけないと、早速調査した地区では、散布者の健診報告会も合わせて、農薬使用にあたっての防具の徹底など、予防教育に力を入れることになった。

その結果、次第に農薬の怖さが分かってきて、防具にも注意するようになったのはよかったのだが、逆に「あれを飲めば死ねるぞ」ということが伝わって、自殺に農薬が使われることが多くなった。農家だから、農薬はいつでも手に入る。自殺を防ぐ手だては甚だ難かしい。一難去ってまた一難であった。

健康知識は上がったけれど

潜在疾病が七割もあつた

衛生指導員たちの懸命のとりくみによって、村ぐるみの健康管理も漸く軌道に乗ってきた。検診によって次々と病気が発見され、早期に治療がなされるようになった。ところが驚いたことに、発見された病気の七割が、今まで医師の治療を受けていないということが分かったのである。

その理由を調べてみると、いろいろな社会的な理由があることが分かった。医療費の一部負担

が払えないこと、医療機関が遠いこと（当時は交通の便が悪かった）、農繁期は忙しくて暇がないこと、お嫁さんが姑に気兼ねして医者に行けないこと、そして健康に対する一般的な無関心さがあった。

若月院長はこれを社会的な意味で「潜在疾病」と名づけた。そして、「がまん型」と「気づかず型」の二つに分類した。「がまん型」とは、症状があるのにがまんして医師にかからないもの、「気づかず型」とは、検査や診察も受けないので、自分が病気であることが分からないものをいう。これらが手おくれにつながっていることは明白だった。

だが、健診が始まってからは早期に医師にかかる人が増え、手おくれが少しずつ減ってきた。とくに脳卒中中、なかでも脳出血による死亡が著しく減少した。健診の効果が出てきたのである。当時の農村では、八千穂村に限らず、死亡原因の第一位は脳卒中だった。がんとか糖尿病などは現在に比べるととても少なかった。がんになる前にみな脳卒中で死んでしまったのである。また食生活も悪かったから、糖尿病にもならなかった。脳卒中が減ったのは、血圧測定で高血圧を早くみつけ、治療や生活指導がなされたせいである。

村会議員から怒られる

ところが、健康管理が始まって村の国保医療費がぐんとはねあがってしまった、これが村の議

会で大きな問題となった。健診をして病気をみつけ、治療が必要と言われた人が医師にかかるようになった結果だから、これはある程度やむを得ないことである。しかし国保が赤字で厳しい時代だったから、国保の医療費が増えるとなると、議会はだまっておれなかった。

衛生指導員の渡辺一明さんは議員たちから随分と怒られた。「手めえたちがあんなことをやるから、見る、ほれ！」といって数字を目の前につきつけられた。別に衛生指導員のせいではないのだが、指導員がいちばん活躍していたから目についたのであろう。

しかし、これは一時的なことであった。健康管理をはじめて七年目くらいから、村の国保医療費は、他町村にくらべて次第に低くなってきた。早期発見、早期治療で手おくれが減ってきたためと考えられた。まさに「予防は治療にまさる」であった。

一方では、健診の意味も少しずつ理解されてきた。婦人会や老人クラブの集まりのときに、こんな話が出るようになったと、保健婦の井出今さんが聞かせてくれた。

「他の村では、五人の子どもがいる父親が、ある日脳卒中を起こして死んでしまったが、今まで一度も血圧を計ったことはなかった。それに比べて八千穂村では、毎年健診があるし、予防的なことも話してくれるので大変有難い」とか、「うちの嫁は、私の血圧が高いので、塩辛いものはつくらないようにいつも注意してくれているし、無理な仕事はしないほうがいいよと言って、細かいことにも気を配ってくれる。健康診断というものはなかなかいいものだ」と。

村民の健康意識未だ上がらず

村ぐるみの健康管理がそろそろ十年目を迎えようというある日、これを機会に村民の意識がどのくらい上がったか、調べてみたらどうかとトラさんが言い出した。

今まで村民の意識をアンケートなどで調べたことはなかったから、松島医師らは一も二もなく賛成した。「だけどあまり難しい質問はだめだよ」と、井出守さんが早速クギをさす。「アンケート出しても、きちんと答えを書いてくれねえぞ」と一明さんは心配顔。

どのような形でやるか、いろいろ議論した末、最終的にはインタビュー調査でやることになった。

だが、誰がインタビューをするかが問題だった。佐久病院のメンバーでは、それを意識して本当のことは答えてはくれまい。衛生指導員も顔をよく知られているからダメだ。結局、佐久病院の看護学生さんをお願いするということになった。

質問項目は皆で相談して、健康知識と健康意識の両方に分けて十項目がつけられた。そして八千穂村と比較対照するために、まだ健康管理を始めていない村として、八千穂村と規模がほぼ同じ程度のK村が選ばれた。看護学生たちは、毎晩二人一組になって両方の村をインタビューに歩いた。K村はふだん知らない土地だったから、家を探すのはとても苦労した。

結果はどうだったか。

ひと口に言えば、八千穂村のほうがたしかに健康知識の点ではK村より上だったが、健康意識の点では、両村の間に殆ど差はなかった。言いかえれば、病気を予防するための日常生活上の注意についてはよく知っているが、自分たちの健康を守るためにみなでどう活動すればよいかということについては、まだ十分な意欲が上がっていないという結果だった。

納屋工場の広がり村の中は大ゆれ

母ちゃんたちの五割が勤めに

「どうも最近では、母ちゃんたちの集まりが悪くなったぞ」「検診報告会にもさっぱり出なくなつたね」「村にできた工場に働きに行っているらしいよ」などと、母ちゃんたちの集まりの悪さが衛生指導員の話題になり始めたのは、昭和四十四年頃のことだった。

小さな電気部品工場が、村に増えてきたのは確かであった。指導員たちがザッとあげてみただけでも、国道沿いだけでなく山間の佐口区に四つ、八郡区も四つ、崎田区に四つなどと、村全域に五十くらいが広がっていた。

そこへ農家の母ちゃんたちが近所のよしみで頼まれたり、みんなが行くから自分もと希望したりで、あれよあれよという間に広がったらしい。健診報告会によく集まっていた女性たちが来なくなった理由は、やはりこれだった。

そこで衛生指導員会で話し合い、健診時に工場通いの実態を聞いてみることにした。その結果、驚いたことに、昭和四十四年の健診時には、三〇歳代、四〇歳代の主婦の五割が、村内の工場勤めか、その内職をしていることが分かった。

しかし、健診会場ではいろいろ聞かれてただでさえ嫌われ気味の受付で、「工場に勤めていますか、どんな作業をしているの、一日にいくらぐらいの稼ぎになるの……」などと、根ほり葉ほり質問するものだから、母ちゃんたちからはますます嫌われてしまった。「これは税金に関係しちゃうかなあ」「親類の家の工場だから変なことは言えないよ」などと曖昧な答えばかりで、なかなか実態がつかめない。

そこで村の工場を直接回って、体調や生活などをインタビューすることになった。

コイル巻きやハンダ付け

佐口区の工場を案内しながら指導員の井出佐千雄さんは、「あのKさんのところは旦那は農業中心で、工場は奥さんが取り仕切っているだよ」などと予備知識を入れてくれる。

だいたい山間部では農家の納屋や二階を改造したいわゆる納屋工場が多く、五人から九人くらいがテーブルを囲んでいる。小さな部品にコイルを巻いたり、ハンダ付け、製品の洗浄などが多く、いかにも器用な女性に向く仕事である。

主婦たちは「私の仕事はこのミシン針みたいな棒の頭を、プレス機でつぶして箱に並べてゆくんだけど、つい頑張ってしまったて、一日二万本くらいやってしまふ。家に帰ると、もう目を開けていられないほどぐったり疲れてしまつて」とか「自分のやつた分を日毎に記録して、給料に計算されてゆくんです。不良品が多いといろいろ言われるんで、集中するから肩もこつて」と、慣れない細かい仕事に神経を使って大変らしい。

国道沿いにはやや大型の独立工場も建てられている。弱電関係の中小企業の下請けや孫請けである。内職もここから出される。ハンダ付けの煙がもうもうと立ちこめていたり、洗浄に使うシンナーのような有機溶剤の匂いが漂うなかで、主婦たちが黙々と手を動かしている。

「肩こり」「目の疲れ」「視力が低下した」という主婦のほか、「薬品による皮膚かぶれ」も見られた。しかし「体質のせいだ」くらいにして、問題にすることを避けている。

労働条件も良いとはいえず、体調も壊れる。それでも文句も出さずに働くのは、工場主への遠慮だけではなさそうである。